

Title	ソーシャルワークの基本的技法とチェック項目方式によるアセスメントツールの乖離
Author(s)	山口, 圭
Citation	聖学院大学論叢, 22(1): 93-104
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=1805
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〈原著論文〉

ソーシャルワークの基本的技法とチェック項目方式による アセスメントツールの乖離

山 口 圭

Discrepancy Between Social Work Skills and Assessment through Item-Checking Systems

Kei YAMAGUCHI

Through repeated analysis of deductive inferences and inductive inferences, social work skills and deviations in assessments made through item-checking systems were considered.

Although social workers carry out assessments aiming at qualitative investigation, they are unable to achieve satisfactory results, as the item-checking systems they employ are quantitative in nature, not qualitative.

Key words; 関係技法, 面接技法, 記録技法, 評価技法, ソーシャルワーク・アセスメント

はじめに

先の「ソーシャルワーク・アセスメントのプロセスが結果に反映されない要因」(山口, 2009)に引き続き, ソーシャルワークにおける基本的技法(佐藤豊道, 2001, p. 274)における関係技法, 面接技法, 記録技法, 評価技法を演繹的推論とし, また, 聞きとり調査等によって得られたデータを帰納的推論これらの分析を交互に繰り返すことによって, カテゴリー化し, 先行する知見と照合させながら, ソーシャルワークの基本的技法とチェック項目方式のアセスメントツールの乖離について考察を行うこととする^(注)。

1 分析・考察

1) 関係技法とアセスメントツールとの乖離

関係技法とは, 「ワーカーと利用者の関係づくりに関わる技術」(佐藤豊道, 2001, p. 274)のこと

ソーシャルワークの基本的技法とチェック項目方式によるアセスメントツールの乖離

であり、ここでいう関係とは、具体的には、両者の間に信頼関係（ラポール）をつくることである。

ソーシャルワーク・アセスメントは、援助過程の始めの局面として位置づけられているものの、実際には単独で存在するのではなく、援助過程の各局面と連動しながら存在するものである。

初期のアセスメントでは、認定調査から始まる情報の収集が行われる。しかし、情報の収集の前に、援助関係を形成することを目指す。援助関係の形成が図られなければ、その後の援助を成立させることができない。

初めて利用者宅を訪ねた際、利用者や家族がワーカーに対して「この人は何者か」という不安を抱きながら援助関係が始まることもある。特に、関係機関からの依頼によってワーカーが利用者を訪問する場合、その不安は一層強くなる。

例：「お年寄りからすれば、何を売りに来たんだろうとか、そういう感じがすごい。こちらも、もたれているんだなっていうのはすごい感じます。(中略) その方と、まだ、関係、人間関係がやっぱりできてないなかでは、聞きづらいついていうのが、ものすごいありますんで。訪問して、とりあえず、その方と顔つなぎで関係をつくっている段階です。情報を集めるっていうよりも、集めるためになんか畑を耕しているというか、なんか雑草を抜いているところから、やっているつもりで、今、やらしてもらってますね。」

情報収集を目的とした訪問であっても、このような場合、アセスメントを行えるように関係をつくることを優先し、徐々に情報収集を行っていくが、援助関係を維持し、発展できるような質問するように気を配っている。

例：「今は、変な業者さんもいっぱい高齢者の方を狙っているでしょう。そういう信頼関係に、ちょっと不信を抱かせるようなことはしないように私はしています。で、それは、家の見取り図も、『お家全体を見せてもらいますか』っていつて見取り図(を)書きたいなことでもそんな信頼関係ができないうちはしませんし。」

徐々に関係が築かれ、情報収集が行えるようになっても、利用者に不信感を与え、関係を壊す調査は控えるようにする。

また、初期の情報収集では、課題に直接関連した質問をするよりも、利用者にとって答えやすい質問を行う。利用者の答えをじっくり聴くことによって援助関係を形成する。

例：「(ライフストーリー)は結構しゃべってくれるので。一応、『どこでお生まれですか』みたいなところからいくと結構入りやすいので、話してくれるんで。趣味は何かあるんですかみたいな。この辺きれいですね。この飾ってるんでどうされたんですかという話をもっていくと、結構話してくださいますよね。」

ライフストーリーは、会話を進めるうえで、きっかけとなることが多い。ワーカーは、単にライフストーリーを聴くだけではなく、利用者の理解につなげていく。ライフストーリーとは、「その人生で意味があると思っていることについて選択的に」語られた、「個人が歩んできた自分の人生につ

いての個人の語るストーリーで」ある（桜井，2002，p. 60）。利用者の人生全体を理解することを通して，利用者の主観的な世界を理解することを目的としており，客観的に生活史を把握するライフヒストリーとは区別される。Germain と Gitterman は，ライフストーリーを援助初期から継続的に援助者と利用者の協同性を働きかける点から評価している（Germain & Gitterman, 1996, p. 106）。

さらに，生活状況を垣間見られるものに囲まれて生活している空間である利用者宅で面接は進められており，部屋のなかのものを糸口に話を聴くことがある。

このように利用者にとって話しやすい話題から入り，援助関係を築く。同時に，利用者の話を聴くことで，ワーカーは利用者の理解を進めていくが，客観的な情報は，アセスメントツールに記入されるが，利用者理解を進めるための主観的な情報は，定性的な情報であるため，ほとんど記入されていない。

信頼関係が形成されるにしたがって，情報収集のための質問がなされていく。「閉じられた質問」を中心に質問を行うとしばしば拒否反応が出てくるため，利用者への質問は，「開かれた質問」を中心に展開される。

例：「（質問項目を順に）最初から聞いていくと，そうしたほうがいい人もいますけど。そうしていると大体皆さん拒否反応が出るので。」

例：「とにかく聴いてくれてっていう人が，待ってましたと。聴いてくれ。これだけ困っているんだと。家族にしても，それからご本人にしてもこれだ，こうなんだよって何回も繰り返し。とにかく話したいっていう方が多いんで，まずは，それを延々と聞くようになっちゃいます。話をおると，やっぱりどうしてもまた戻るので。コッチが事務的に進めてもそういう場合は理解してくれなくて。」

「開かれた質問」から発展する自然な話の流れを通して，ワーカーが「質問」しなくても，必要な情報を収集していくことができる。また，援助関係が創出された後でも，ワーカーは利用者のプライバシーの尊重に最大限の配慮を行い，質問のタイミングを図っている。

例：「保険証なり，年金について，質問するようにしているんですけども。最初からは，全然聞いていないです。そこが私も聞かれたら嫌だなあって思っている部分なので。『何であんたにいわなきゃいけないの』って自分も思うので。それに関しては，大変失礼ですが，といえるときに，聞くようにしているの。」

例：「ずいぶん長いことかかわっていても，ご家族の姿勢によって，家のプライバシーを見せないみたいな方もおられますので。そういうときは，聞かないで。ただ，利用額の減額の制度があるので，こういうのありますけれどもっていうので。特に，ヘルパーさんなんかの利用の減額できたらすごくて，3%負担になりますので。そういうところでちょっと予測しているだけで。」

問題を予測しながら「開かれた質問」を多用し，問題状況を明らかにしていく。しだいに，必要

な情報で収集されていないものを「閉じられた質問」を使って確かめるが、プライバシーにかかわる情報を質問する場合は、細心の注意をはらっている。

一方、チェック項目方式によるアセスメントツールは、定式化しているため、質問がしやすい。その反面、MDS-HCのように200項目にわたる調査項目について「様式に沿って、一文一句、問いただすやり方」（佐藤豊道, 2001, p. 278）では、ワーカー・利用者関係を損なうことが多いため、利用者やその家族にチェック項目方式によるアセスメントに関する理解が得られない場合、実際に行うことが難しい。

例：「（試験的にMDS-HCによる）アセスメントをして、あのアセスメントは大変ですから、チェックするときに、奥様が、『大変ねっ』とっていただい。『まだあるの。大変ね。ハイハイどどん聞いてください。』という感じで、したんですけど、ふたを開けてみると、（このケースにおいてポイントとなる）その奥様の精神状態とか、介護者側の問題とか、ほとんど出てこなかったんですね。」

例：「項目は、結構、ストレートに聞くと、難しい部分が多いので。まずは、ちょっと世間話的なお困りのことみたいなそういうきっかけをつくるような形から入っていくことが多いですね。例えば、こういう（チェック項目方式による）アセスメント調査のほうに関しても、すごく項目が細かいですし、それは、ご本人もわからないってような感じのところもあるので、状況を見ながら、ちょっと時間をかけながらっていう。」

チェック項目方式のアセスメントツールにおいても、開かれた質問を使って情報を収集することを強調しているが、時間的な余裕がないなかでは、項目が多いため、埋まっていかない。

例：「私は、お話のなかから予測していくほうで。流れで。必ず、全部の項目をチェックできなくてもいいっていうふうに思っています。」

例：「何回かやっているうちに少しずつ慣れてきて、ここはちょっと省いてもいいかなっていう話のもってきたをするようにしているんですが。」

例：「話を聞きながらその該当するところにチェックしていくと。そこで、聞ききれなかったりした部分については、その人の普段の言動から想起したりしてますかね。必ずしも、アセスメントの項目全部をしっかりと自分は、全部聞いてしているわけではないんです。」

質問を避け、観察によって記入したり、他機関からの情報を入れたり、利用者の言動から予測したりして、項目を埋める努力がされているが、項目はすべて埋まらない。

チェック項目方式によるアセスメントツールは、最低限必要な項目で成立しており、MDS-HCのように200項目の調査項目をすべて記入しないと、総合的な判断は歪んでしまう。一応、項目を削除することもできるが、CAPsを慎重に検討し、その機関において対象とならないCAPsをトリガーする項目について削除することが可能だけである。勝手にMDS-HCの調査項目を省略することはできない。このMDS-HCは、「一つの論理によって組み立てられており、一部を加除すると全体

の整合性が失われる」(厚生福祉編集部, 1997, p. 8) ためである。

さらに、時間的な余裕がないワーカーにとって、このようなアセスメントの調査項目を埋めることに疑問を感じている者も多い。

例：「(MDS-HCの項目を) 大変な思いでチェックをして、本当の問題が出てこないのに、そこに書かれていないことは、問題じゃなくって。(中略) そんなにアセスメントツールに力を入れて。シートを埋めるためのアセスメントというのは、私なんかしなくていいように思うんですけど。」

チェック項目方式によるアセスメントツールの項目の多さについて、情報の収集と同時に援助関係の創出・維持・発展を重視するワーカーは、疑問を感じている。また、項目を埋める労力に対して得られた生活課題は、ワーカーの見通しとは、大きく異なることもある。

2) 面接技法とアセスメントツールとの乖離

岩間 は、面接とは、「ワーカーとクライアントの援助関係を展開される言語・非言語を用いた援助の方法であり、目的、時間、場所、援助関係、援助過程といった一定の条件によって構造化される」と定義している。さらに、アセスメント技法としての面接の特質について、①面接を通してクライアントの世界に近づく、②面接を通してクライアントの気づきを促進する、③面接を通してクライアントの変化を継続的に捉える、という3点から指摘している(岩間, 2001, p. 12)。

地域型におけるワーカーの面接の特徴は、利用者を取り囲む「身体的、社会的、心理的、文化的『空間』」(佐藤豊道, 2001, p. 280)における「生活場面面接」を展開することである。

例：「訪問回数を多くするのは、すごく、私は良いと思ってしているんですけど。時間がかかるので。訪問をするとやっぱり、思わぬ発見とかがあったり、私はすごく意義を認めているんですけど。電話にしといたらね、見なくて良いニーズも。一回で済んじゃうことなんですけれど。何回も伺っちゃったりしますよね。その後。」

利用者がどのような空間で生活しているのか理解が深まり、利用者の生活の場で利用者を観察し、様々な利用者の生活状況などを理解することができる。他の方法では把握できない生活課題が浮かびあがってくる。

観察技法と調査技法と連動した生活場面面接のなかで、単に生活課題の抽出だけではなく、利用者の日常的な生活が把握され、利用者の世界に近づくことができる。

さらに、前述した関係技法と重なって、生活場面面接では関係づくりを行うとともに、情報収集や、関係づくりから発展して、利用者の抱える課題について、じっくりと利用者の語りを聴き、それからワーカーと利用者が一緒になって、生活課題を明らかにするための面接を行うこともある。

例：「アセスメントよりも、まず、じっくりお話を聴く。聴いて、その人の喪失している部分とか、いろいろ思っていること、その人自身が自分で語れるような、言葉に表現できる状態まで。」

ソーシャルワークの基本的技法とチェック項目方式によるアセスメントツールの乖離

あの、もっていきっていうんですか。自分で言葉ができれば、問題が見えてきて、次のステップにいきますよね。そこらへんは、アセスメントには、書こうと思えば書けるのかもわからないんですが。」

調査のための面接をこえて、利用者の話を聴く過程のなかで問題を利用者と共に明らかにするというかわりである。ソーシャルワーク・アセスメントが一つの援助として位置づけられる。これは、窪田が指摘する「生活の実態とそこにおける問題を明らかにするため」の「生活状況アセスメントのための臨床的面接」（窪田，1991，p. 57）に当てはまる。

このような面接は、援助者には、「生活状況の具体的なイメージを与え」る一方で、利用者には、自分の生活に関心を示す援助者の面接によって、「日常生活を見直し、生活の質の向上の課題と援助を必要としている領域を認識する得難い機会」となる。同時に、窪田は、こうした面接を行うにあたって、自由に関連事項を語ってもらう必要があり、「チェックリストの形式を避ける」ことを指摘している（窪田，1991，p. 68）。

3) 記録技法とアセスメントツールとの乖離

アセスメントにおいて、必要な「情報が散逸されないように」、「予め記録様式として定式化」（佐藤豊道，2001，p. 277）することは大きな意義がある。このような理由もあって様々なアセスメントツールが開発されている。

しかし、チェック項目方式によるアセスメントツールは、標準化された調査項目であるため、定量的に把握が可能な情報しか記入することができない。

情報収集から得た情報を、チェック項目方式によるアセスメントツールに記載する際、すべての情報が記載できないことにワーカーは、違和感をもつ。

例：「（利用者が）いろんなことを話されて。それでもやっぱり、書いてみて、ああこのくらいしか書けないんだっていう。改めて思いますから。この項目を埋めるっていうのが、難しいなあって。」

利用者から話されるストーリーは、援助を組み立てる際に活用できるものも多い。しかし、定性的な情報はチェック項目に記載することが難しいため、ポイントを押さえられないこともある。

こうしたなかで、一つのアセスメントツールに頼ることの限界を指摘している者もいる。

例：「アセスメントツールには多分特徴があるんだから、大まかに問題を分けて、ADLの状況に問題がある人のアセスメントツールだとか、家族状況とか、人間関係とか、家庭内の人間関係とかに問題がある方のアセスメントツールとか、それから、まったくの医療的な、病気の療養のことについての、ターゲットを絞ったアセスメントツールとか、大まかな問題を抽出したら、どのアセスメントを使うかというアセスメントをしなければいけないですね。それを何でも一つの方法でしているから、ほしいところが出てこないですよ。」

ソーシャルワークの基本的技法とチェック項目方式によるアセスメントツールの乖離

しかし、限界を承知していながら、居宅介護支援の契約書上、一つのアセスメントツールしか採用することができない面もある。

例：「本当は、いくつかのアセスメント方式を併用させていきたい希望はあるんですが。うちの居宅支援事業所の契約書上、MDS-HC方式でアセスメントを行いますっていう、その一つの方式しか謳ってなかったもんですから、ちょっと他の方式がとれない、そこをどうするかってことについては、まだ、未整理です。」

居宅介護支援の契約書では、使用するアセスメントツールが何であるかを明示しなければならない。そのため、記載されたアセスメントツール以外のものだけを使用すれば契約違反になってしまう。

同時に、他のアセスメント方式についての知識がない者もいる。知識の不足から他のアセスメントツールを選択し、使用することができないからである。

例：「他の方式を、何だろうな、選択したいんだけど、その他の方式に対する知識が私にないのと。知識がないから選べないんだな。他の方式について知らない。」

これは、介護支援専門員の研修会において、その介護支援専門員が選択した一つの方式しか研修を受けないことも影響している。

では、ワーカーが把握した定性的な情報は、どのように残されているのだろうか。実は、こうした情報は、叙述体を用いた経過記録のなかに書かれている。

例：「(チェック項目から抜け落ちた情報は)記録にしていけないので。手書きでやっていくという方法で。記録として残していかなってはいけない部分があるので。逆に記録がものすごい量になるんです。」

ワーカーのなかには、記録技法について学んだことがない者もいる。記録を書く際、何を記録に残し、何を記録に残さないかという判断基準が明確になっていないため、「記録がものすごい量になる」場合もあり、各人によって記録内容は大きく異なっている。

一方で、こうした経過記録を書く作業を積み重ねることによって、新たな情報の相互関連性が浮かびあがることもある。

例：「書いているということによって、逆に新しい部分が出てくることもあるんですね。」

記録を書くことによって、情報の整理がなされ、分析が進んでいく。さらに、書くということを通して、観察や調査をしていたときには思いもよらなかった発見に結びつくこともある。

また、情報を分析する際、チェック項目方式によるアセスメントツールを見るのではなく、経過記録を読み直している。

例：「何かあればその記録(経過記録)を見れば、時系列的には対応が可能です。だから、問題とかも自分のなかで整理をしますんで。それをちゃんとまとめたほうが、それは良いと思いますんで。」

ワーカーは、経過記録の情報を分析することによって、援助方針を組み立てるという作業を行っている。しかし、ワーカーは、経過記録の情報分析をソーシャルワーク・アセスメントの分析過程として捉えていない。

寫末と小島は、ケースワークにおけるアセスメントの特質として、「ケースワークではケース記録そのものがアセスメントツールであるといってもよい」と指摘する。「ケースワークにおいてアセスメントの範囲はあらかじめ選択肢として列挙されるよりも、むしろ援助過程における面接を通じて援助過程が叙述的または要約的に、またエコマップ等の活用により力動的に記録され、非定型的な情報として把握」されるからである（寫末・小島，1998，p. 59）。

したがって、経過記録から情報を分析していく作業は、ソーシャルワーク・アセスメントにおける情報の分析の一つであると考えられる。

佐藤郁哉は、フィールドノーツにおいて、「ストーリー性をもっている記録」の形式が「社会生活におけるさまざまな出来事の状況や『文脈』を再現する上で最も効果的な文体」であるとしている。（佐藤郁哉，2002，p. 206）こうした文体は、ソーシャルワークでは、過程叙述体と呼ばれるものである。ソーシャルワーク・アセスメントにおいて経過記録を有効に活用するためには、過程叙述体によって経過記録を記述することが望ましいであろう。

しかし、現実には、ワーカーは、多忙な業務のなかで、経過記録を書いているため、記録は圧縮叙述体を用いた経過記録になってしまう。

例：「ケース記録には、忙しくないときには、しっかり書きますし、忙しいときには、ホントに認定調査にいったというくらいしか書けないんですけど。基本的にはポイントだけは、ケース記録に書かなくてはいけないと思うんですけど。ただ、書けないときもありますし、全然書けないで記録が飛んじゃってるときもあります。ただ、みんなケース記録はよく書いているとは思いません。」

日々の業務の忙しさによって、経過記録の記述の量や質は一定ではないこともある。同時に、記録を整理し、どのように分析や解釈を行ったかという過程を記録に残すことは難しい。

例：「まとめることによって、自分の整理もできますから、もちろんしたほうがいいんですけど、でも、それは時間がないので。」

時間的に余裕がないため、どのように記録から情報を分析し、援助方針を組み立てたのかという過程が文章化されていない。このような過程を記録化することが、ワーカー特有のソーシャルワーク・アセスメントを把握する手がかりになると思われる。

ワーカーは、定性的な情報の記録ができないチェック項目方式によるアセスメントから漏れた定性的な情報を経過記録のなかに記述する作業を行っている。

4) 評価技法とアセスメントツールとの乖離

評価は、終期評価 (evaluation)、もしくは、ワーカー・ソーシャルワーク支援過程全体の評価を意味し、一般的には、アセスメントとは区別される。しかし、ここでは、評価を「収集したデータの処理とそれに対する考察」(岩間, 1999, p. 192) するものとして広義に捉えておく。

評価方法は、大きく分けると「定量的評価法 (量的調査)」と「定性的評価法 (質的調査)」がある。前者は、統計的方法の使用やチェック形式で記録されることに特徴があり、後者は、記述形式で評価が記録されることに特徴がある。

ワーカー養成のテキストの多くが、「定量的評価法」のみについて言及し、「定性的評価法」に関しては、事例研究法に若干触れられるだけで、ほとんど言及されないということから明らかなように、「定性的評価法」に関する研究は進んでいない (例えば、芝野, 2001, pp. 178-198; 岡田, 1999, pp. 157-173 を参照)。

また、定性的評価についての誤解は依然として残っており (竹内, 1997, p. 13)、定量的評価に基づいたチェック項目方式によるアセスメントが、客観的に行えるものであるとされていることが多い。

定性的評価が確立していないなかで、しかも、定性的評価は客観的ではないという誤解もある。チェック項目方式によるアセスメントでは捉えきれない情報、すなわち、ワーカーが、観察・調査・関係・面接・記録という技術を駆使して収集した定性的な情報は、ワーカー自身、客観的ではないと感じている。

しかし、ワーカーにとって、チェック項目方式によるアセスメントツールによって「じっくりこない」結果が出た場合、ワーカー自身の頭のなかで、定性的な情報を含め、情報を総合化し、分析を行っている。

例：「(MDS-HC は) で出てきた問題領域が、そのまま (生活課題に) スパンと収まるわけじゃなくて。こっ (アセスメントツール) から、また、抽出したり、ここ (アセスメントツール) で出てこないところから引っ張ってきたりってところで、こういう形 (ケアプラン) に作りあげちゃうんで。(中略) MDS (-HC) も一つの方法でしかない。」

定性的な情報を含めたソーシャルワーク・アセスメントの結果は、あくまでもワーカーの個人的な主観に基づくものとして扱われ、その分析過程は表面に出てこない。

定性的評価は客観的ではないという誤解のなかで、ワーカーは、経験的に用いている定性的評価の技術を意識化できないまま、定量的な評価に基づいたチェック項目方式によるアセスメントに対して漠然とした違和感をもっている。

3 結論

ワーカーは、質的調査にそったアセスメントを実施しているが、そのプロセスを量的調査に基づくチェック項目方式のアセスメントツールでは捉えきれないため、結果として表出することができない。さらに、質的調査にそったアセスメントのプロセスをワーカー個人の主観的なものとして扱い、しかも、情報収集や分析、生活課題の抽出の過程についてほとんど記録していないため、表面化していない。ワーカーは、ツールに対して違和感を覚えつつも、質的調査に対する誤解もあり、経験的に用いている技法を、ワーカー自らのなかに内在化させてしまっている。

ジェネラリストが行う質的調査にそった技法を活用し、ソーシャルワーク・アセスメントを外在化させ、客観性を高めるために、質的調査技法を活用したアセスメントの再構築が必要である。

なお、本稿は、拙著『ソーシャルワーク・アセスメントを規定する要因—地域型在宅介護支援センターの相談員への調査から—』の一部を用い、改めて分析し、概念化を図ったものである。

最後になりましたが、調査にご協力をいただいた相談員の皆様、X区Y総合福祉事務所の職員の皆様に深く感謝いたします。

(注) 聞きとり調査の対象者は、東京都X区地域型在宅介護支援センターの相談員のうち、社会福祉士、介護福祉士に限定した(以下、両福祉士を示す場合を「ワーカー」とする)。本研究では、介護福祉士が調査対象として含まれている。これは、佐藤豊道(2001, p. 448)の見解にしたがうとともに、地域型の介護福祉士はケアワークを展開するよりも、主たる機能をソーシャルワークに置き、実践していることを考慮したからである。

聞きとり調査は、2002年9月から11月にかけてLoflandらの『社会状況の分析』に示されたガイドにしたがって、理論的サンプリングを用い、ワーカーの10名に対しておこなった(Lofland & Lofland, 1995)。インタビューと並行して行われるデータの分析の進度に応じて、インタビュー・ガイドの項目の様式と順列は変更していった。対象者には、このインタビュー・ガイドにそって自由に回答してもらった。録音した音声を逐語録に起こすとともに、インタビュー記録の作成を行った。得られたデータについて、コーディングを行い、カテゴリー化していくことによって分析を進めた。

引用・参考文献

- Emerson, Robert M., Fretz, Rachel I. & Shaw, Linda L. *Writing ethnographic fieldnotes*, University of Chicago Press 1995 (エマーソン, R.M.・フレッツ, R.I. ショウ, L.L. (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳)『方法としてのフィールドノート—現地取材から物語作成まで』新曜社 1998.)
- 藤林慶子「高齢者ケアプランにおけるアセスメント」『ソーシャルワーク研究』20(4) 1995 pp. 37-44.
- 藤園秀信「介護支援サービスにおけるニーズ・アセスメントの枠組み試論」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』No. 3 2002 pp. 69-78.
- Germain, C. B. & Gitterman, A. *The life model of social work practice: advances in theory & practice—2nd ed.*, Columbia University Press 1996.
- Glaser, Barney G. & Strauss, A. L. (1967) *The discovery of grounded theory: strategies for qualitative*

- research, Aldine. (グレイザー, B. G.・ストラウス, A. L. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳) (1996) 『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』新曜社.)
- Glaser, Barney G. & Strauss, A. L. *The discovery of grounded theory: strategies for qualitative research*, Aldine 1967. (グレイザー, B. G.・ストラウス, A. L. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳) 『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』新曜社 1996.)
- Hepworth, Dean H., Rooney, Ronald H. & Larsen, Jo Ann. *Direct social work practice: theory and skills-6th ed.*, Brooks/Cole 2002.
- 岩間伸之「ソーシャルワークにおける質的評価法としての事例研究」『大阪市立大学生活科学部紀要』No. 47 1999 pp. 191-202.
- 岩間伸之「ソーシャルワークにおけるアセスメント技法としての面接」『ソーシャルワーク研究』26(4) 2001 pp. 11-16.
- Kemp, Susan P., Whittaker, James K. & Tracy, Elizabeth M. *Person-environment practice: the social ecology of interpersonal helping*, Aldine de Gruyter 1997. (ケンブ, S. P.・ウィンタカー, J. K.・トレシー, E. M. (横山譲・北島英治・久保美紀・湯浅典人・石河久美子訳) 『人一環境のソーシャルワーク実践—対人援助の社会生態学』川島書店 2000.)
- 厚生福祉編集部「ケアプラン作成のためのアセスメント方式の例①(5月 厚生省高齢者ケアサービス体制整備検討委)」『厚生福祉』45(75) 1997 pp. 6-9.
- 窪田暁子「食事状況に関するアセスメント面接の生まれるまで—実態把握と理解の臨床的面接」『生活問題研究』vol. 3 1991 pp. 55-80.
- Lofland, John & Lofland, Lyn H. *Analyzing social settings: a guide to qualitative observation and analysis-3rd ed.*, Wadsworth 1995. (ロフランド, J.・ロフランド, L. (進藤雄三, 宝月誠訳) 『社会状況の分析—質的観察と分析の方法』恒星社厚生閣 1997.)
- 松岡敦子「アセスメントにおける技法とツールの意味」『ソーシャルワーク研究』26(4) 2001 pp. 4-10.
- Milner, Judith. & O'Byrne, Patrick. *Assessment in social work*, Macmillan 1998. (ミルナー, J.・オルバーン, P. (杉本敏夫・津田耕一監訳) 『ソーシャルワーク・アセスメント—利用者の理解と問題の把握』ミネルヴァ書房 2001.)
- 箕浦康子『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィ入門』ミネルヴァ書房 1999.
- 中村佐織『ソーシャルワーク援助過程におけるアセスメントの展開と方法』大阪府立大学大学院社会福祉学研究科博士学位論文 1998.
- 新津ふみ子「MDS方式を使ったケアプラン作成の実際」『介護福祉』No. 37 2000 pp. 11-52.
- 小田博志・山本則子・春日常ほか「質的研究用語集」『質的研究入門—「人間の科学」のための方法論』春秋社 2002. (Flick, Uwe *An introduction to qualitative research-2nd ed.*, SAGE 2002.)
- 岡田進一(1999)「評価技法」白澤政和・尾崎新・芝野松次郎編『社会福祉援助方法論』有斐閣, pp. 157-173.
- 佐藤郁哉『フィールドワーク—書を持って街へ出よう』新曜社 1992.
- 佐藤郁哉『フィールドワークの技法—問いを育てる, 仮説をきたえる』新曜社 2002.
- 佐藤豊道『介護福祉のための記録15講』中央法規 1998.
- 佐藤豊道『ジェネラリスト・ソーシャルワーク研究』川島書店 2001.
- 佐藤豊道「口述の生活史研究法」『ソーシャルワーク研究』27(4) 2002 pp. 35-40.
- 芝野松次郎「直接援助技術における効果測定と評価」福祉士養成講座編集委員会編『社会福祉援助技術論』中央法規 1999 pp. 178-198.
- 寫末憲子・小嶋章吾「ケアマネジメントにおけるアセスメントツールの比較検討—ケアワークの視点から」『介護福祉学』5(1) 2000 pp. 58-72.
- 竹内孝仁『ケアマネジャー—アセスメントとケアパッケージの組み方』医歯薬出版 1997.

- 内田恵美子「日本版成人・高齢者用アセスメントとケアプラン（財団方式）」『介護福祉』No. 38 2000 pp. 41-92.
- 山口圭『ソーシャルワーク・アセスメントを規定する要因—地域型在宅介護支援センターの相談員への調査から』東洋大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻修士論文 2003.
- 山口圭「ソーシャルワーク・アセスメントのプロセスが結果に反映されない要因」『聖学院大学論叢』21(3) 2009 pp. 307-320.
- 若松利昭「援助システムの人間化」川田誉音・大野勇夫・牧野忠康ほか編『社会福祉援助方法論』みらい 1996 pp. 62-76.